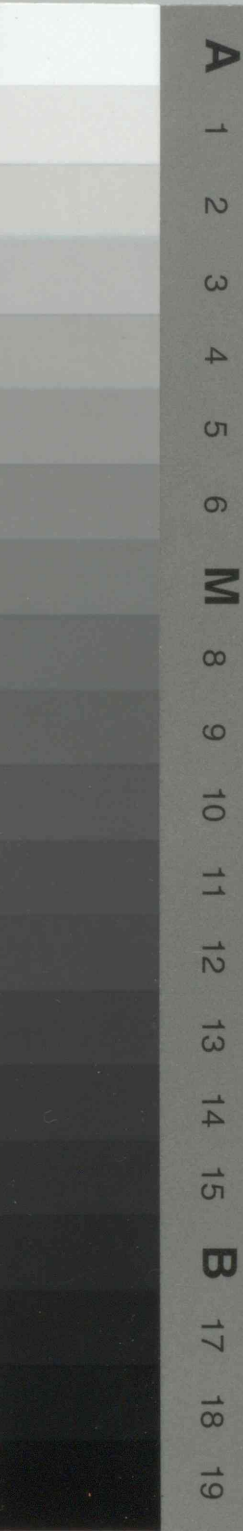
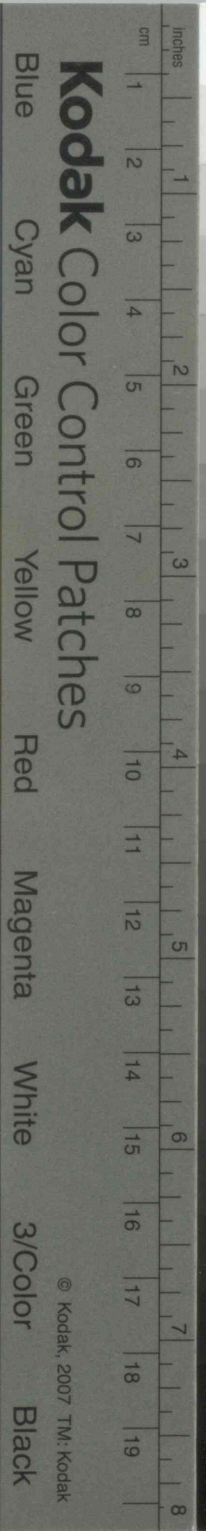
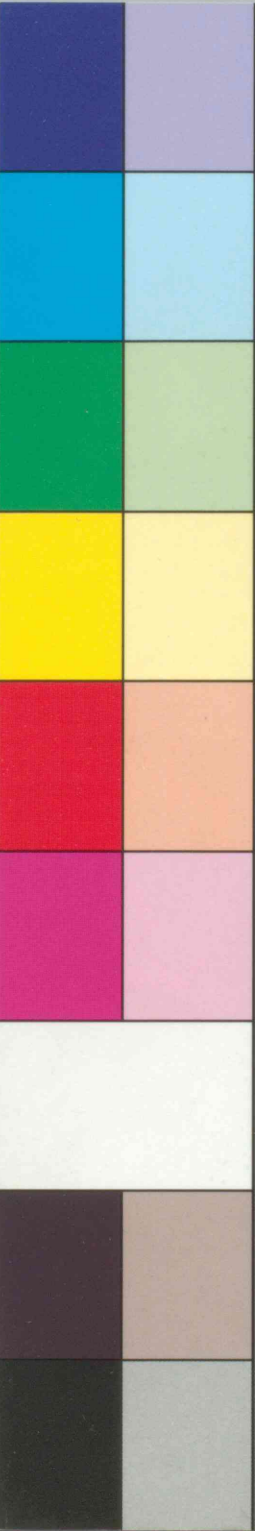


改定新體女子文法

全

375.9
Ka19
資料室



42161
教科書文庫
4
815
42-1921
20000
53572

325.9

Ka19

文部省檢定

大正十一年一月二十一日 師範學校高等女子國語科用

奈良女子高等
師範學校教授

文學士春日政治著

改定
新體女子文法

東京 修文館藏版



はしがき

本書は編者が曩に世に問ひたる「新體女子文法」を改修したるものなり。其の編纂の趣意、一篇の結構等に於ては盡く舊本に據ると雖も、全篇に亘りて及ぶ限り簡約省略を行ひ、随つて分量の凡そ三分の一を減じたと、體裁に於て、上下二卷なるを合して一本となし、別に圖表を集めたる一冊子を添へたるとは、舊本と面目を異にせる主要點にして、一に舊本使用者の希望に基きしものなり。平易なる説明を與へて、眞意義の了得に力を用ひたること、品詞篇と文章篇との呼應に意を注ぎたること等に至りては、もとより舊本と其の方針を同じうせ

はしがき

はしがき

り。冀はくは、大方の更に批正を吝まれざらんことを。

奈良の僑居に於て

大正九年九月

編者 識す

改定 新體女子文法

目次

上篇 語の品別……………	一
第一章 品詞の職分……………	三
第一節 名詞……………	四
第二節 代名詞……………	七
第三節 動詞……………	二一
第四節 形容詞……………	二三
第五節 副詞……………	二七
第六節 接續詞……………	三〇

目次

一

第七節	感動詞	三
第八節	助詞	二四
第九節	助動詞	二六
第十節	九品詞	二六
第二章	品詞の形態	三〇
第十一節	活用する品詞	三三
第一	動詞の活用	三三
第二	動詞の活用形	三四
第三	口語動詞の活用及び活用形	四七
第四	形容詞の活用及び活用形	五一
第五	動詞の自他	五七

第六	敘述の自他	六三
第七	助動詞の活用及び活用形	六六
第八	活用語語尾の假名遣	七三
第十二節	活用せざる品詞	八〇
第三章	品詞の接續	八九
下篇	文の構成	九四
第四章	文	九四
第五章	文の成分	九六
第六章	成分の倒置及び省略	一〇四
第七章	文の組織上の種類	一〇八
第八章	文の敘述上の種類	一一三

改定新體女子文法目次終

改定新體女子文法

文學士春日政治編

上篇 語の品別

一 語及び單語

- (一) ことばに おのづから はふそく あり。
- (二) わたくしは ことし から ぶんぱふ を
ならひ ます。(口)

右の文(一)のことばに、おのづからはふそく及びありは各

(口)は口語
文の符號な
り。文語文
には符號を
附せず。

上篇 語の品別

或意味・職分を有して語なり。(二)のわたくしはことしか
らぶんばふをならひ及びますも亦同じ。而もこれらの
語は或意味・職分を持ち得る最小單位なれば、ことに單語
といふ。

二 品詞

單語は其の職分と形態との上より別ちて、若干の群とし、
其の一つ々の群を品詞といふ。

練習 左の文を單語に分て。

- 一 春は一年のうちの最も好き時節なり。
- 二 やうく戦争が止まりました。(口)
- 三 上野の森に運動會あり、隅田の流に競漕會あるべし。

第一章 品詞の職分

三 品詞の職分

- (一) 春風 が そよく 吹く。(口)
- (二) 散る 花 庭 の 面 に 白し。

右の文の春風・花庭及び面は「なに」といふ物の名をあらは
し、吹くと散るとは「どうする」といふ動作をあらはし、白し
は「どんなだ」といふ有様を「そよく」は「どんなに」といふ有
様をあらはし、がの及びには上下の語の關係をあらはせ

- 四 搖籃を揺かす母の手は、亦よく天下を動かす。
- 五 けふできる事をあすまで延すな。(口)

り。かく語はその有する意味によりて、それなく、その職分を異にす。品詞の別ちは主として其の職分の異なりによる。

第一節 名詞

四

事物の名をあらはす品詞

- (一) 清少納言も紫式部も昔の才女である。(口)
- (二) 日本は獨逸の租借地たる青島を陥れ、領地たる南洋諸島を占領せり。
- (三) 容は梅の如く、操は松の如し。
- (四) あの花は右が白で、左が赤だ。(口)

五

右の文の中の傍線を施したる語は、皆事物の名を「なに」といひあらはせり。

事物の名をあらはす品詞を名詞といふ。
數をあらはす名詞

- (一) 一つに二つを加へて三つなり。
 - (二) 其の五つめが實は第四の品です。(口)
- 右の文(一)の一つ、二つ及び三つは事物の數量を「いくら」といひあらはし、(二)の五つめと第四とは順序を「いくつめ」といひあらはせり。
- 事物の數量をあらはす「いくら」も、順序をあらはす「いくつめ」も、廣く見れば、共に「なに」といふものの中なれば、亦名詞

の一種とし、特に數詞といふ。

練習 左の文の名詞を抜き、ことに數詞を別て。

- 一 春夏秋冬を四時といふ。
- 二 校友會雜誌の第二號を出せり。
- 三 上野公園の山王臺には、彰義隊の墓や、西郷隆盛の銅像がある。(口)
- 四 一を聞き十を知る。
- 五 世はしきりに改造を叫んでゐる。(口)
- 六 吉野山霞の奥は知らねども、見ゆる限りは櫻なりけり。
- 七 ビールやマツチは、盛に清國や南洋に輸出される。(口)

第二節 代名詞

六 事物の名の代りに用ふる品詞

- (一) 我、汝の事を彼に告げん。
- (二) これはそれより大きい。(口)
- (三) その物をあなたへ運べ。

右の文(一)の我、汝及び彼は人の名の代りに、(二)のこれとそれとは事物の名の代りに、(三)のそこは場處の名の代りに、あなたは方向の名の代りに用ひらる。

事物の名の代りに用ふる品詞を代名詞といふ。

代名詞は「だれ」「どれ」「どこ」「どちら」などいひあらはす語に

七

して、皆「なに」といふ名詞の代用なり。
實體の觀念をあらはす品詞
名詞代名詞は引きくるめて見れば、皆「なに」といふ間に應
ずる語にして、廣く實體の觀念をあらはすものなり。さ
れば合せて、體言といふ。

八

文の題目となる品詞

- (一) 花 咲く。
- (二) 水 清し。

右の例(一)は花を題目とし、それにつきて咲くと述べ、(二)は
水を題目とし、それにつきて清しと述べたるなり。
或事物を題目とし、それにつきて敘述をなす語の結合を

文といふ。

- (三) 花 鳥を 招く。
- (四) 雪 花に 似る。
- (五) 私 が 鶏に 餌を 與へる。(口)
- (六) 心 水に 同じ。
- (七) 月日は 水より 速い。(口)

等も皆文なり。而してその敘述にはいろいろの形あれ
ども、いづれも「なに」かにつきて述べざるべからざれば、其
の題目となる語は皆名詞若しくは代名詞即ち體言なり。
體言は文の題目となる品詞なり。

練習 左の文より代名詞を抜き出せ。

- 一 わが村はかの山のこなたに在り。
- 二 お前はあちらへ行つて遊べ。(口)
- 三 わらはもかねて君の御芳名をば承り居り候。
- 四 この本はわたくしの、その筆はあなたのです。(口)
- 五 これ誰の過ぞや。
- 六 こちは知らぬが、そちは知れるか。
- 七 平和が重い荷を背負つて來た。(口)
- 八 病は口より入り、禍は口より出づ。
- 九 小積りて大となる、千里の道も一步より起り、萬仞の山も一簣に始まるが如し。

左の文より體言を抜き出せ。

九

事物の動作をあらはす品詞

第三節 動詞

- (一) 字を書き本を読む。
 - (二) うれしき事を喜び、かなしき事を憂ふ。
 - (三) 鳥が鳴き、花が落ち、水が流れる。(口)
- 右の文(一)の書きと讀むとは人の動作、(二)の喜びと憂ふとは人の心の動作、(三)の鳴き、落ち及び流れるは自然物の動作にして、何れも「どうする」といひあらはせり。
- 事物の動作をあらはす品詞を動詞といふ。

練習 左の文より動詞を抜き出せ。

- 一 蠶は絲を吐き、蜂は蜜を釀す。
- 二 月落ち、鳥啼き、霜天に滿つ。
- 三 岩石が面白く並び、木立が小暗く繁る。(口)
- 四 學を修め、業を習ひ、以て智能を啓發し、徳器を成就す。
- 五 雨が降る前には、必ずこの山に雲がかゝる。(口)
- 六 男は外に狩り、女は家に紡ぐ。
- 七 心こゝにあらざれば、視れども見えず、聽けども聞えず、食へどもその味を知らず。

第四節 形容詞

二

事物の有様をあらはす品詞

- (一) 雪は白く、墨は黒し。

(二) 山は高く、海は深い。(口)

(三) 長き竿を以て、高き枝の果物を落す。

(四) 正しい行をして、美しい一生を送れ。(口)

右の文の白く、黒し、高く、及び深いは事物の有様を、どんなだといひあらはし、長き、高き、正しい及び美しいは事物の有様を、どんなといひあらはせり。

事物の有様をあらはす品詞を形容詞といふ。

二 實體の用をあらはす品詞

動詞のあらはす動作及び形容詞のあらはす有様は、實體より起り、若しくは實體に屬するものにして、これを體の用といふ。故に名詞・代名詞を合せて體言といふに對し

三

て動詞・形容詞を合せて用言といふ。
文の敘述をなす品詞

- (一) 花 咲く。
- (二) 水 清し。

八頁、八を見

右の二例の如きものを文といふこと、並びに其の題目となる品詞の、體言なることは已に知る所なれども、こゝにはその敘述をなす品詞の如何を見んとす。

(一)の文は「何がどうする」といふ形にて、敘述をなす語は動詞、(二)の文は「何がどんなだ」といふ形にて、敘述をなす語は形容詞なり。

文はいかに複雑となりても、多くは此の二つの形を出て

ず。

- (三) 花 鳥を 招く。
- (四) 雪 花に 似る。
- (五) 私 が 鶏 に 餌を 與へる。 (口)
- (六) 心 水に 同じ。
- (七) 月日は 水より 速い。 (口)

等は單複の度こそ異なれ、皆かの二形の何れかに入れり。されば、文は其の敘述に於て、多くは動詞若しくは形容詞、即ち用言を要す。用言は文の敘述をなす品詞なり。

練習 左の文より形容詞を抜き出し、其の「どんな」の義か「どんなだ」の義かを區別せよ。

- 一 父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。
 - 二 良い薬は苦い。(口)
 - 三 山けはしく、水清く、松青く、砂白し。
 - 四 その赤い着物は古いが、この白い帯は新しい。(口)
- 左の文より用言を抜き出し、ことに敘述となれる語を別て。
- 五 いぶせき伏屋に細き烟をたてたり。
 - 六 流るゝ小川の水いと清し。
 - 七 年の少くて才の優れた女がある。(口)

第五節 副詞

三 用の有様をあらはす品詞

- (一) 汽車速かに走る。
 - (二) 富士山がはつきり見える。(口)
 - (三) 室や、狭し。
 - (四) 山路は大層寂しい。(口)
- 右の文(一)の速かにと(二)のはつきりとは走る・見えるといふ動作の有様を「どんな」といひあらはし、(三)のやと(四)の大層とは狭し寂しいといふ有様の有様(すなはち程度)を「どんな」といひあらはせり。

事物の用(動作若しくは有様)の有様をあらはす品詞を副詞といふ。

副詞は事物の用の有様をあらはす語なれば、用言(動詞若しくは形容詞)に副はる。されど、副詞のあらはす有様に、更に他の副詞を以て有様附くることあり。

(五) 汽車甚だ速かに走る。

(六) 富士山が極はつきり見える。(口)

右の文(五)の甚だは副詞速かにの有様程度をあらはし、(六)の極は副詞はつきりの有様程度を附くる副詞なり。故に副詞は他の副詞にもそはる。

四

文の修飾となる品詞

(一) 美しき花 咲く。

(二) 浅き水 清し。

右の文の美しきと浅きとは形容詞にて、どんなといふ有様を附けて、花水の體言を飾れり。

(三) 花 さかりに咲く。

(四) 水 いと清し。

右の文のさかりにといととは副詞にて、どんなにといふ有様を附けて、咲く清しの用言を飾れり。

形容詞と副詞とは文の修飾となる品詞なり。そのうち形容詞は體言の修飾となり、副詞は用言の修飾となる。

練習 左の文より副詞をぬき出せ。

- 一 風徐ろに吹きて、波高く起らず。
 - 二 彼は仕事を最もまじめに勉める。(口)
 - 三 しばし待て、決して汝に迷惑をかけざるべし。
 - 四 よく聞いて忘れるな。(口)
 - 五 態々御出で下され候ひしに、生憎不在いたし、甚だ遺憾に存じ候。
- 左の文より修飾となる品詞をぬき出せ。
- 六 烈しき暑さなりしかば、草木いたく枯れたり。
 - 七 うれしい知せをうれしく聞いて、大層うれしい。(口)
 - 八 大いに勉めざれば、成ること少し。

第六節 接續詞

二五

語句文章をつなぎ合する品詞

- (一) 月及び花を愛づ。
ともしよ
- (二) 五月の空、晴れ又曇る。
ハルシヨ
- (三) 毛筆或は鉛筆を持參すべし。
- (四) 山を越え、かつ海をわたる。
- (五) 春は來れり。されども、花未だ開かず。

右の例の及び、又、或は、かつ及び、されどもは上下の語句文章をつなぎ合する用をなせり。

語句文章をつなぎ合する品詞を接續詞といふ。

練習 左の文より接續詞をぬき出せ。

- 一 英・米・佛・伊及び日の五大國を會す。
 - 二 花若しくは月あるべし。
 - 三 秋立ちたり、故に風涼し。
 - 四 何人にも入場を許す、但し六歳以下のものは此の限りにあらず。
- 讀本の既習の部分につきて、接續詞を求めよ。

第七節 感動詞

二六 感動に發する品詞

- (一) あな、うれし。
- (二) ああ、草臥れた。(口)
- (三) あはれ、かの君は逝きしか。

- (四) ええ、うるさい。(口)

右の例のあな、ああ、あはれ及びええは感動したる時、思はず發する聲なり。

感動せる時發する品詞を感動詞といふ。

練習 左の文に感動詞を入れよ。

- 一 ○○うれし、よろこばし。
- 二 ○○○今年の秋もいぬめり。
- 三 ○○○お珍らしいこと。(口)
- 四 ○○○出發せん。
- 五 ○○○さうですか。(口)

諸子の知れる感動詞を示せ。

第八節 助詞

二七

語と語との關係をあらはす品詞

- (一) 馬は人を乗せて遠く走る。
- (二) 羅馬から東京まで飛んだ。(口)
- (三) 再びかへり見しが、もはやあらざりき。
- (四) 行けば行かれる。(口)

右の例のはをてからまでが及びばは語の下につきて、その語と他の語との關係をあらはす語なり。
 語の下につきて、その語と他の語との關係をあらはす品詞を助詞といふ。

練習 左の文より助詞を抜き出せ。

- 一 花の顔、月の眉。
- 二 月にむら雲、花に嵐。
- 三 梅と櫻を兩手にもつ。(口)
- 四 今より幾日にて達するか。
- 五 雨がひどく降るに、風までが烈しく吹く。(口)
- 六 よく勉強したが、からだは弱かつたから、合格しなかつた。(口)
- 七 これ何の讀む。
- 八 話〇聞い〇涙〇こぼれた。(口)
- 九 氣候〇寒けれ〇〇健康〇〇害なし〇いふ。

第九節 助動詞

六 動詞を助けて種々の意味を附くる品詞

- (一) 書を讀まず。
- (二) 朝早く起くべし。
- (三) ヴエルサイユに、講和會議を開いた。(口)
- (四) 私も見に行かう。(口)

右の例の「べし」た及び「ら」は動詞の下につきて、其の動作にいろ／＼の意味を附くる語なり。
 動詞の下につきて、其の動作に種々の意味を附くる品詞を助動詞といふ。

五 獨立して意味をもたぬ品詞

助詞と助動詞とは、獨立してはその意味をなさず、他の語に附きて其の語の助けをなすにすぎず。この點、他の品詞と頗る趣をことにすれば、特に名づけて助辭といふ。

練習 左の文より助動詞を抜き出せ。

- 一 いざ見にゆかん
- 二 使を遣はして急を都に告げしむ。
- 三 君は未だ遠くは行かじ。
- 四 今年もすでに半ばは過ぎぬ。
- 五 子供に花をとりにゆかせる。(口)
- 六 残暑もまだ退くまい。(口)

- 七 人の心もかくてありたし。
- 八 六尺の扉も飛び越えられる。(日)
- 九 かゝる人を見ざるなり。
- 一〇 お菓子がたべたい。(日)

第十節 九品詞

九品詞

別表第一圖を見よ。

品詞は以上學びたる名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・接續詞・感動詞・助詞及び助動詞の九つにて、各其の職分を異にせり。

その中、特に名詞・代名詞をば體言といひ、動詞・形容詞をば用言といひ、助詞・助動詞をば助辭といふ。而して體言は

文の題目となり、用言はこれが敘述をなし、形容詞・副詞は修飾をなす品詞なり。

練習

左の文を品詞に分別せよ。

- 一 衣服はよく風を通し、日に當て汚れたるをば洗ふべし。
- 二 空中を支配する時代が來た。(日)
- 三 心に望起らば、困窮したる時をおもひ出すべし。
- 四 すいた事には身をやつす。(日)
- 五 すつかり忘れて居たことがあつた。(日)
- 六 ああ正成よ、正成よ。
- 七 器具は多く木や金で造られ、又土や石からも造られる。(日)
- 八 朝顔のさくや親にも叱られず。

カコナイ

語幹

語尾

第二章 品詞の形態

三

形の變化する語と變化せざる語

彼の乗りたる馬は甚だ疾し。

右の文の動詞乗るは

乗らず。 乗りたり。 乗る。 乗れども。

の如くかはり、助動詞たりは

乗りたらん。 乗りたり。 乗りたる馬。 乗りたれども。

の如くかはり、形容詞疾しは

疾く走る。 疾し。 疾き馬。 疾けれども。

の如くかはる。 しかるに、

彼の。 馬。 は。 甚だ。

等は、如何なる場合にも、其の形をかふることなし。

品詞は、其の場合によりて、形の變化するものと變化せざ

るものとあり。 其の變化をば活用といふ。

活用する語には動詞・形容詞及び助動詞あり、活用せざ

る語には名詞・代名詞・副詞・接續詞・感動詞及び助詞あり。

練習 左の文の品詞を、活用する語と、活用せざる語とに別て。

一 運動すれば食慾進む。

二 遠き親類より近き他人。

三 父母は我を生み、我を養ひ、我を長せしめ、我を教へたり。

四 少年老い易く、學成り難し。

別表第二圖を見よ。

上篇語の品別、第二章品詞の形態

五 弟は已に學校にゆきしが、妹は未だ家を出でず。

第十一節 活用する品詞

第一 動詞の活用

三 動詞の活用の種類

死な ^ず 。	書か ^ず 。	消え ^ず 。
死に ^{たり} 。	書き ^{たり} 。	消え ^{たり} 。
死ぬ [。]	書 ^く 。	消ゆ [。]
死ぬ ^{(る)人} 。	書 ^く 文字。	消ゆ ^{(る)雪} 。
死ぬ ^{(れ)ども} 。	書 ^け ども。	消ゆ ^{(れ)ども} 。
死ぬ [。]	書 ^け 。	消え ^(よ) 。

名動 助動
月出^つれは^は始^はり
来^きる言^げひ
来^きる言^げひ
来^きる言^げひ
来^きる言^げひ

活用する
名動 助動
女は^は未^まだ家^{いへ}を出^でず
弟は^は已^いに學校^{がっこう}にゆ^ゆきしが
妹は^は未^まだ家^{いへ}を出^でず

三

右の例に於ける如く、動詞の活用は必ず五十音圖の同行内に於てす。されど、其の形式は一樣ならず。今分類してその種類を見んとす。

四段活用

書か ^ず 。	縫は ^ず 。
書き ^{たり} 。	縫ひ ^{たり} 。
書 ^く 。	縫 ^ふ 。
書 ^け ども。	縫 ^へ ども。

右の例の如く、五十音圖のアイウエの四列にわたりて變るものを四段活用といふ。

四 十行變格活用

死ぬにぬ
死ぬにぬ
死ぬにぬ

死なず。

死にたり。

死ぬ。

死ぬる人。

死ぬれども。

死ぬ。

死ぬといふ語は、ナ行のアイウエ四列にわたりて變ること、四段活用と同じけれども、更に其のウ列音ぬにぬれのそはりたる形を有す。これをナ行變格活用といふ。

三

ラ行變格活用

有らぬ。

ラ行變格

有り
有り
有り

有

有り。

有るなり。

有れども。

有りといふ語は、ラ行のアイウエ四列にわたりて變ること、四段活用と同じけれども、いひ切る形有りにてイ列音なるは、四段活用のウ列音なると異なり。これをラ行變格活用といふ。

三

上二段活用

起きず。

起く。

起く(る)なり。

落ちず。

落つ。

落つ(る)なり。

起くれれども。

落つれれども。

右の例の如く、五十音圖のイ・ウ二列にわたりて變り、更に其のウ列音にるれのそはるものを上二段活用といふ。

下二段活用

受けず。

消えず。

受く。

消ゆ。

受くるるなり。

消ゆるるなり。

受くれれども。

消ゆれれども。

右の例の如く、五十音圖のエ・ウ二列に變り、更に其のウ列音にるれのそはるものを下二段活用といふ。

上二段活用

六

射ず。

煮ず。

射る。

煮る。

射れども。

煮れども。

右の例の如く、五十音圖のイ列音より外變らず、更にるれのそはるものを上二段活用といふ。

下一段活用

蹴ず。

蹴ず。

蹴る。

蹴る。

蹴れども。

蹴るといふ語は、カ行のエ列音より外變らず、更にるれのそはりたる形を有す。これを下一段活用といふ。

三

カ行變格活用

來カず。

來カたり。

來カ。

來カ(る)なり。

來カ(れ)ども。

來といふ語は、カ行のオ・イ・ウ三列にわたりて變り、更に其のウ列音にるれカのそはりたる形を有す。これをカ行變格活用といふ。

三

サ行變格活用

爲サず。

爲サたり。

爲サ。

爲サ(る)なり。

爲サ(れ)ども。

爲といふ語は、サ行のエ・イ・ウ三列にわたりて變り、更に其のウ列音にるれサのそはりたる形を有す。これをサ行變格活用といふ。

すは他の語と合成して、動詞を作ること多し。かゝるものには時として濁りてザ行活用となるものあり。欲す、罪す、要す、生ず、論ず、進歩す。

三

動詞の九活用

有リ 居リ 異リ 侍リ 皆

別表第三圖を見よ。

動詞の活用にはすべて九種あり。四段ナ行變格ラ行變格上二段下二段上一段下一段力行變格及びサ行變格これなり。

練習 左の文の動詞を抜き出し、其の活用をいへ。

- 一 敵の司令官は白旗を掲げて降れり。
- 二 立つ鳥跡を濁さず。
- 三 今日くる友を迎へんと、急ぎて停車場に車を走せたる人あり。
- 四 楽しみは珍しきふみ人にかりては、はじめ一ひらひろげたるとき。
- 五 年少き中に習慣となることは、終身永續して變せず。
- 六 各人その能率を進むるに力めよ。
- 七 隠れたるより見る人はなし。

第二 動詞の活用形

三 用法による動詞の活用

動詞の活用する各の形は、其の用ひ處を異にせり。されば其の用法によりて、動詞の活用形を分類することを得。

四 未然形

- 人行かば。 蟲死なば。 暇あらば。
- 兒起きば。 賞を受けば。 裕を著ば。
- 球を蹴ば。 客來ば。 車の音せば。

右の例の如く、下に助詞ばを附して、動作の起ることを假定するに用ふる活用形を未然形といふ。

未然形は助動詞^んを附して、動作の未來に起るをあらはし、助動詞^ずを附して動作の起らざるをもあらはす。
 明日、われ行かん。
 蟲未だ死な^ず。

三

連用形

行き過ぐ。 死に絶ゆ。 あり難し。
 起き出づ。 受け取る。 著かふ。
 蹴たふす。 來あはす。 しそこなふ。
 右の例の如く、下の動詞・形容詞にいひつゞくる活用形を連用形といふ。
 連用形は多くの動作のつゞきて起る時、前の動作をいひ

帯
せが
ふ

三

終止形

さす形となり、又この形にていひ据うる時は名詞となる。
 親は起き、兒はいねたり。
 往きは早く、歸りは遅し。
 人行く。 蟲死ぬ。 女あり。
 兒起く。 賞を受く。 裕を著る。
 球を蹴る。 客來。 車の音す。
 右の例の如く、下につゞけず、言ひきるに用ふる活用形を終止形といふ。
 終止形は又助詞^ともを附して動作を假定することをあらはす。

三

連體形

面に矢を受くとも、かへりみはせじ。

行く人。

死ぬる蟲。

家にある人。

起くる兒。

受くる賞。

著る裕。

蹴る球。

來る客。

音する車。

右の如く、下の體言にいひつゞくるに用ふる活用形を連體形といふ。

連體形はその下の體言を省きて、そのまま體言代用をなすことあり。

起くるを見て、寝ぬるをやむ。

三

已然形

人行けば。

蟲死ぬれば。

女あれば。

兒起くれば。

賞を受くれば。

裕を著れば。

球を蹴れば。

客來れば。

車の音すれば。

右の例の如く、下に助詞ばを附して、動作の起りたるを確定するに用ふる活用形を已然形といふ。
已然形は又ど若しくはどもを附して、動作を確定することをあらはす。

客あれども、主人なし。

元

命令形

汝行け。

安らかに死ね。

さきくあれ。

早く起きよ。

賞を受けよ。

裕を著よ。

十行彦
死すは
人
めれ
め
め

別表第四圖を見よ。

球を蹴よ。 また來よ。 復習をせよ。
右の例の如く、動作せんことを命令するに用ふる活用形を命令形といふ。

練習 左の文の中より動詞を抜き出し、其の活用を檢し、更に六つの活用形を作れ。

- 一 繪葉書は獨逸より流行し初めしものと聞く。
- 二 良人に事へ、子をはぐくみ、炊ぎと濯ぎとに日を送りぬ。
- 三 茸なども生ひ出でん、栗もはや落つべし。

- 左の文の中より動詞を抜き出し、其の活用形をいへ。
- 四 小切手は通貨にて支拂をなす手数を省かんが爲發行するものなり。
- 五 徳幽蘭のかをりに似すや。

直用形
用言
四段活用
ア、イ、ウ、エ、オ
下二活
見、ず
下二活
九

左の文にある動詞の活用形に誤用あらば正せ。
六 山里に隠る人は全く世の名利をば捨つる。
七 汝もしかの地に旅行すれば、必ず友の墓をおとづるれ。
八 たとひ死ぬれども、退かじ。

第三 口語動詞の活用及び活用形

四 口語動詞の活用

書かう。	死なう。	有らう。
書きます。	死にます。	有ります。
書く。	死ぬ。	有る。
書けば。	死ねば。	有れば。

右の例の如く、文語の四段活用ナ行變格活用ラ行變格活

用は、口語にて共に**四段活用**なり。

著シない。起トきない。

著る。起トきる。

著れば。起トきれば。

右の例の如く、文語の上二段活用、上一段活用は、口語にて共に**上一段活用**なり。

蹴キない。受ケけない。

蹴る。受ケける。

蹴れば。受ケければ。

右の例の如く、文語の下二段活用、下一段活用は、口語にて共に**下一段活用**なり。

別表第五圖を
見よ。

來キない。

來キます。

來キる。

來キれば。

文語のカ行變格活用は、口語にても**カ行變格活用**なり。

しシない。

すスる。

すスれば。

文語のサ行變格活用は、口語にても**サ行變格活用**なり。
口語動詞の活用は**四段・上一段・下一段・カ行變格・サ行變格**
の五つなり。

上篇語の品別、第二章、第十一節、第三口語動詞の活用及び活用形

四

口語動詞の活用形

別表第六圖を
見よ。

口語動詞の活用以上の如くなれば、其の活用形も亦これに準ぜり。

たゞ文語の已然形に當る形に、助詞ばを附する時は、

あなたが書けば、わたしが讀みませう。(口)

五時にも起きれば、起きられないことはない。(口)

の書けば、起きればの如く、動作の未だ起らざる前に假定する意をあらはす故に、特に**假定形**と名づく。

四段活用以外の命令形は、口語文に於ても、

落ちよ。見よ。消えよ。蹴よ。來よ。爲よ。

の如く、文語と同じ形に用ふることあり。

- 一 鶏が鳴けば、夜が明けよう。(口)
- 二 雪が降り、氷の張る冬が来る。(口)
- 三 しようとは決心すれば、きつとし遂げる。(口)
- 四 今日あなたを迎へるうれしさが、胸一ぱいに溢れます。(口)
- 五 起きろと起す人となれ起される人になるな。(口)

第四 形容詞の活用及び活用形

三 形容詞の活用

清くすむ。 つらく思ふ。

水清し。 心つらし。

清き水。 つらき事。

清けれども。

つらけれども。

右の例の清しもつらしも、共にくしきけれと活用す。形容詞の活用は皆一様にくしきけれなり。されど、

美しく咲く。

同じく行く。

美し○。

同じ○。

美しき花。

同じきこと。

美しけれども。

同じけれども。

等の如く、其のいひ切る形に、しをつけざる語あり。

形容動詞

清かららず。

美しからず。

清かりき。

美しかりき。

三

清かるべし。

美しかるべし。

清かれども。

美しかれども。

右の例の清かり美しかりといふ語は、もと清く美しくに各動詞ありのつゞきて約められ、ラ行變格活用となりたるものなり。

この類の語は、職分に於ては、形容詞と同じく、形態に於ては、動詞と同じければ、特に形容動詞と名づけ、形容詞の一種とす。

四 形容詞の活用形

未然形 行かば。

善くば。

悪しくば。

連用形 行き著く。

善くあり。

悪しくあり。

別表第七圖を見よ。

望

別表第八圖を見よ。

哭

終止形 人行く。

行善し。

行悪し。

連體形 行く人。

善き行。

悪しき行。

已然形 行けば。

善ければ。

悪しければ。

命令形 行け。

……

……

右の例の如く、動詞の活用形に形容詞を比べ見るに、形容詞にも未然・連用・終止・連體・已然の五活用形あれども、たゞ命令形を缺きたり。

形容動詞の活用形

形容動詞はラ行變格活用なれば、活用形も亦動詞のラ行變格活用と全く相同じ。

口語形容詞の活用及び活用形

清くすむ。

美しく咲く。

清い。

美しい。

清い水。

美しい花。

清ければ。

美しくければ。

右の例の清い・美しいは共にく・い・けれと活用す。即ち文語にていひ切る時、しを附けざる美しの類も、口語にては美しいといを附くれば、清いの類と全く一様になれり。活用形に於て

未然形 清くば。

……

連用形 清くすむ。

清くすむ。

終止形 清し。

清い。

別表第九圖を見よ。

連體形 清き水。 清い水。

已然形 清ければ。 清ければ。(假定形)

の如く、形容詞の文語・口語を比べ見るに、口語形容詞は未然形を失ひ、く・い・けれの四形となれり。

連用形は次の如くうとなることあり。

お早うございます。

美しうございますこと。

練習 左の文より形容詞を抜き、其の活用形を檢せよ。

- 一 朱に交れば赤くなり麻の中の蓬扶けずして直し。
- 二 古いものは美しくはないが品がよい。(口)
- 三 君は酸からず甘からず辛きはいかに唐辛。
- 四 暑いも寒いも彼岸まで。(口)

左の文語を口語になほせ。

- 五 貧しき家にわびしく暮すは悲し。
- 六 一方に利多からんも他方に害少からず。
- 七 聲勇ましく謠ひゆく兒等いと賑はし。

第五 動詞の自他

自動詞と他動詞

- (一) 水 流る。
- (二) 栗 落つ。

右の例の流る落つといふ動作は、これを起す主なる水若しくは栗のひとりなしつゝあるものなれど、

- (三) 水 花を 流す。

(四) 弟 栗を 落す。

の流す落すといふ動作は、これを起す主なる水若しくは弟の上へのみ止まらで、花栗の如き他のものを處分す。動作のそれを起す主へのみ止まりて、他に關係なきものを自動といひ、それを起す主へのみ止まらで、他を處分するものを他動といふ。自動をあらはす動詞を自動詞といひ、他動をあらはす動詞を他動詞といふ。

他動詞には必ず花を栗をの如く何をといふ語を要す。

哭 自他の對

流るの自動詞に對して、流すの他動詞あり、落つの自動詞の自動詞に對して、落すの他動詞あれども、すべての動詞皆しかる

にはあらず。

鳥 死ぬ。

女 あり。

犬を 打つ。

衣を 着る。

の死ぬありは自動詞にて、之に對する他動詞なく、打つ着るは他動詞にて、之に對する自動詞なし。

風 吹く。

風 花を 吹く。

小兒 笑ふ。

小兒 大人を 笑ふ。

門 閉づ。

小使 門を 閉づ。

右の例の上のは自動詞、下のは他動詞なれど、全く同一の語の場合によりていづれにもなり得るものなり。

民家 焼く。(カ行下二段) 兵火 民家を 焼く。(カ行四段)

軍隊 進む(マ行四段) 我が軍陣地を 進む(マ行下二段)
 子 育つ(タ行四段) 母 子を 育つ(タ行下二段)
 右の例の上のは自動詞、下のは他動詞にて、一見同一の語の如くなれども、其の活用の異なるに注意すべし。

戦 起る。 列國 戦を 起す。

湯 冷ゆ。 風 湯を 冷す。

日 出づ。 家 火を 出す。

食糧 盡く。 敵軍 食糧を 盡す。

風 揚る。 子供 風を 揚ぐ。

右の例も、上のは自動詞、下のは他動詞なれども、これらは語末を見れば、直ちに活用の異なる語なるを知るべし。

要するに、動詞には自他相對するものと相對せざるものとあり、相對するものには、全く同一の語を兩用するものと、語頭の相似て活用の異なるものとあり。

練習 左の文の動詞の自他を別ち、尙それに相對する

語あらば述べよ。

- 一 水嵩増して舟覆らんとす。
- 二 視れども見えず、聴けども聞えず。
- 三 みだりに金錢を費すを止めよ。
- 四 春水四澤に満ち、夏雲奇峯峙つ。
- 五 日は山を照りて紫雲を起る。
- 六 舟を彼の岸に着きて、人を下る。

左の文の動詞の自他に誤あらば正せ。

七 心が喜に満してゐる。(口)

第六 敘述の自他

兎

自動詞にて敘述をなす文。

(一) 花 咲く。

(二) 鳥が 飛ぶ。(口)

右の文の敘述、咲く・飛ぶは自動詞にて、其の動作の及ぶ「何を」といふ目的を要せずして、意味完きことは已にいへり。

(三) 雪 花に 似る。

(四) デンヤネルが 大統領と なる。(口)

の敘述、似る・なるは自動詞にて、「何を」といふ目的を要せざ

吾

ること、咲く・飛ぶと同じけれども、其の動作の標準となるものをいはずれば意味完からず。自動詞にて敘述をなす文は、目的を要せざれども、語によりては標準を要するものあり。

形容詞にて敘述をなす文。

(五) 水が 清い。(口)

(六) 山 遙かなり。

右の文の敘述、清い・遙かなりは形容詞、遙かなりは形容動詞にて、他に目的をも標準をも要せずして、意味完きこと、咲く・飛ぶなどの自動詞に同じ。されど、

(七) 心 水に 同じ

(八) 月日は 水より 速い。(口)
 の同じ・速いは水に・水よりの如き標準をいはざれば、意味完からざること、似るなるなどの自動詞に同じ。
 形容詞にて敘述をなす文には目的を要せず、たゞ比較をなす時に標準を要す。

五

他動詞にて敘述をなす文。

(九) 花 鳥を 招く。

(一〇) 風が 花を 散す。(口)

右の文の招く散すは他動詞にて、鳥を花をの如き目的をいはざれば、意味完からず。

(二) 妹 衣物を 弟に 著す。

(三) 私が 鶏に 餌を 與へる。(口)
 の著す・與へるは他動詞にて、衣物を餌をの如き目的を要すること勿論なれども、更に弟に鶏にの如き標準をいはざれば、意味完からず。
 他動詞にて敘述をなす文は、すべて目的を要し、語によりては更に標準を要するものあり。

練習

左の文に要する標準若しくは目的を補へ。

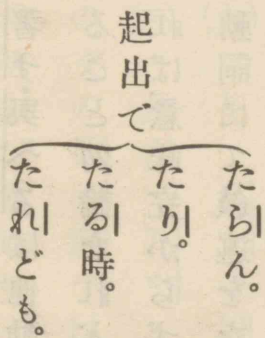
- 一 天の星……稀なり。
- 二 我が家の猫……捕ふ。
- 三 先生が……授ける。(口)
- 四 字を書くには……ペンが速い。(口)

第七 助動詞の活用及び活用形

三 動詞やうの活用

- (一) 彼は今日も早く起出でたり。
- (二) 父、彼をして庭を掃かしむ。

右の例(一)のたりは



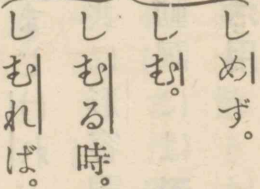
の如く、動詞のラ行變格活用と同じく活用し、(二)のしむは

助動詞の下ナリ
川の掃かしむ
又ラ行變格
は用す。

三

三

掃か



の如く、動詞の下二段活用と同じく活用す。
かく助動詞には動詞と同じく活用するものあり。

形容詞やうの活用

- (一) 一週間の後には花も散るべし。
 - (二) 夜はまだ明くまじ。
- 右の例(一)のべしは
べくば。

散る

べし。
べきもの。
べければ。

の如く、(二)のまじは

まじく見ゆ。

明く

まじ。○
まじき頃。
まじけれども。

の如く、共に形容詞と同じく活用す。

かく助動詞には形容詞と同じく活用するものあり。

特殊の活用

(一) 花も散りき。

(二) 夜はまだ明けじ。

右の例(一)のきは

き。

散りし花。

しかば。

の如く活用し、(二)のじは少しも活用せず。

かく助動詞には動詞にも形容詞にもなき活用をなすも

の、又は活用せざるものあり。

五

助動詞の活用形

助動詞もまた動詞・形容詞の如く六つの用法にあてて、其

別表第十圖を
見よ。

本篇語の品別、第二章、第十一節、第七助動詞の活用及び活用形

五

の活用形を考ふることを得。
口語助動詞の活用及び活用形

- (一) 生徒に本を讀ませる。(口)
- (二) 犬が打たれる。(口)

右の例のせるれるは

せよう。

讀ませる。

せれば。

打たれる。

れれば。

れない。

の如く、動詞やうに下一段活用なり。

- (三) 風も吹かない。(口)
- (四) 人の道は知りたい。(口)

右の例のないたいは

なくなつた。

吹かない。

なければ。

知りたい。

たくない。

たければ。

の如く、形容詞やうに活用す。

- (五) 雨が降つた。(口)
- (六) 私も参ります。(口)

右の例のたますは

たら、いかない。

降つたり、吹いたり。

た。

参りました。

ます。

ませう。

別表第十一圖
を見よ。

の如く、特殊の活用をなす。
口語助動詞の活用にも、動詞やうのもの、形容詞やうのもの、及び特殊なるものあり。

練習 左の文より助動詞を抜き出し、其の意味及び活

用をいへ。

- 一 かしこに立てるはわが友なり。
存在 指定
- 二 行かうと行くまいとおまへの勝手だ。(口)
打指 指定
- 三 知らざるを知らずとする、これ知れりといふべし。
打指 音行味 打指
- 四 「いざ、花のあらん限り集め見すや」といへば、姉と妹とは、はや遅れ
打指 打指 じと摘み始めたり。

左の文より助動詞を抜き出し、文語をば口語に、口語を

ば文語に改め見よ。

- 五 玉もみがかざれば、光を放たず。
なげし
- 六 宿題をやつて見よう、うまく解かれるかわからない。(口)
るか
- 七 使をして、明日旅立たんよしを報せしむ。
しせ
- 八 私がいひつけられた著物を、妹に縫はせることにした。(口)
しむることにしたり 動詞

第八 活用語語尾の假名遣

動詞の語尾

すべて、動詞の語尾は五十音圖の同行内に活用するものなれば、その活用の何行なるかを知る時は、語尾の假名遣を誤ることなし。

動詞の語尾の相紛るゝは、ア行・ハ行・ヤ行及びワ行なり。

語尾とは語の活用する部分
をいふ。八一
頁語幹と合せ
見るべし。

其の内、ア行活用なるは

(得) え。 う。 うる。 うれ (下二段活用)

(射) い。 いる。 うれ (上一段活用)

ヤ行活用なるは

老 悔 報 い。 ゆ。 ゆる。 ゆれ (上二段活用)

癒 覺 消 聞 越

肥 凍 沍 榮 聳

絶 生 映 冷 殖

吼 見 燃 萌

え。 ゆ。 ゆる。 ゆれ (下二段活用)

ワ行活用なるは

植 飢 据 惹。 う。 うる。 うれ (下二段活用)

(居) 率 ゐ。 ゐる。 ゐれ (上一段活用)

等なれば、他は大抵ハ行活用なりと知るべし。

又濁音はザ行のジズとタ行のヂヅと相紛るれど、ザ行活

用なるは

掘 じ。 ず。 ずる。 ずれ (上二段活用)

混 ま ぜ。 ず。 ずる。 ずれ (下二段活用)

の二語のみなれば、他は皆タ行活用なりと知るべし。

變ず。 論ず。 生ず。 命ず。

等の如く、ツ行變格活用の連濁によりてザ行活用とかは
りたるものは、見分くること難からず。

形容詞助動詞の語末の濁音はすべてザ行なり。

同。じ。 凄。ま。じ。 い。み。じ。 (形容詞)
 行。か。ず。 行。か。じ。 行。く。ま。じ。 (助動詞)

動詞は五十音圖の同行内に活用するものなれば、其の活用形の或一つの假名遣を知る時は、他の形のは自ら推知することを得る場合多し。得のえなることを知らば、うを誤ることなく、教へを知らば、教ふのふをう。若しくはゆなど誤ることなく、老ゆを知らば、老いのいをひ。若しくはみなど誤ることなく、消ゆを知らば、消えのえをへ。若しくはゑなど誤ることなく、植ゑを知らば、植うのうをふ。若しくはゆなど誤ることなかるべし。

五 音 便

語は發音の便によりて、其の原音の變じて他音となることあり。之を音便といふ。活用語の語尾には、音便多し。

鳴。き。て。……………鳴。い。て。
 嗅。ぎ。た。り。……………嗅。い。だ。
 指。し。て。……………指。い。て。
 悲。し。き。か。な。……………悲。し。い。か。な。
 赤。き。花。……………赤。い。花。
 高。し。……………高。い。
 あり。た。き。事。……………あ。り。た。い。事。
 行。く。ま。じ。……………行。く。ま。い。

右の例の如きをイ音便といふ。イ音便の假名をひ。おな

ど書くべからず。

謠ひて……………謠うて。

長く……………長うて。新訂

あるべくもあらず……………あるべうもあらず。新訂

行かん……………行かう。新訂

右の例の如きをウ音便といふ。ウ音便の假名をふと書

くべからず。

死に……………死んで。

飛び……………飛んで。

摘み……………摘んで。

軽く……………軽んず。

用言 修飾
副詞 形容詞 体言
偏音
半偏音
清音

撥音
促音

右の例の如きを撥音便といふ。撥音便の假名を死むて

飛むてなど書くべからず。發音のまゝんと書くべし。

行きて……………行つて。

待ちたり……………待つた。

歌ひて……………歌つて。

取りたり……………取つたり。

右の例の如きを促音便といふ。促音便は發音のまゝ書き記さば假名遣を誤ることなし。

練習 左の文の活用語語尾の假名遣を正せ。

- 一 よく霜雪に堪ゆるを松のみさをという。
- 二 皆樂しむで業に就く様感づるに餘りあり。

三 田をうへる少女の菅笠が揃ふている。(口)

四 盲蛇におぢづとは、知らざることには大膽なるをいへるなり。

左の文の音便を指摘して、誤あらば正し、更に原音に改むべし。

- 五 昨夕は御來車を辱ふし、久しぶりに拜顔をう得候うて、こよなふうれしう存じ候。
- 六 あの布は、友だちに裁つて縫つふてもらふた。(口)
- 七 木に縁つて魚を求むる、難ひかな。
- 八 呼むで、應へられぬほど、間のぬけたものはなからふ。(口)

第十二節 活用せざる品詞

五 名詞

き(木) ひと、くに、やま、ところ、すめらぎ、天の原

右の例の如く、名詞はそのすべてに通じたる形態上の類似をば求むべからず。只活用語より轉成したるものは、ほゞ一定の形あり。

かすみ、こほり、おび、たかひ、よろこび、たかひ

等は動詞より轉成したるものにて、これらはいづれも動詞の連用形にて、いひ据うるを常とす。

あか、しる、あを、くる。(語幹)

とほく、ちかく、おほく。(連用形)

すし、からし。(終止形)

おもひ、かるさ、うれしげ。(語幹にみさげのつきたる形)

語幹とは活用
語の活用せざ
る部分をい
ふ。三頁、尾と
合せ見るべ
し。

等は形容詞の轉成したるものにて、その中、語幹のみのもの、語幹にみ^レさ^レげのつきたるもの最も多し。

著物、枯草、筆立、水入、書取。終止形、連用形

高山、輕石、足輕、襜高、遠淺。

等の如く、熟語を作る場合には、動詞は連用形、形容詞は語幹のみなるが常なり。

國語の數詞は、固有語と外來語とを混用し、普通、事物を數ふるには、

ひとつ、ふたつ、みつ、よつ、いつつ、むつ、ななつ、固有語やつ、ここのつ、小とを、十一、十二、十三、二十、五十七、百、千、萬。

とをばつを添へず。

とをの下に語をそふる時はをを省く。

の如く、十までは固有語を、十一以上は、外來語を用ふ。

固有語にはつをそふるを常とし、之をそへざる形は單獨に用ふることなく、下に語をそふる時にのみ用ひらる。

ひとり、ふた棟、いつ箱、ここの度、と組。

無名數の計算には、一より始めてすべて外來語を用ふることあり。また下に語のそはること勿論なり。

三に九を加へて、五を減じ、四を乗じて、七にて除す。

七本、十三回、八十六歳、二千三百五十五尺。

代名詞

代名詞の、人の名の代りに用ふるものを人代名詞といひ、事物・場處・方向の名の代りに用ふるものを指示代名詞と

を

別表第十二圖
を見よ。

いふ。人代名詞の自己を呼ぶを**自稱**、相手を呼ぶを**對稱**、自己・相手以外を呼ぶを**他稱**といひ、それと定まらぬものを呼ぶを**不定稱**といふ。指示代名詞の、自己に尤も近きものを呼ぶを**近稱**、やゝ離れたるものを呼ぶを**中稱**、遠きものを呼ぶを**遠稱**、いづれと定まらぬものを呼ぶを**不定稱**といふ。

人代名詞は多く語末にれを有し、指示代名詞は、事物にれ、場處にこ、方向になた、もしくははかた、及びちを有す。

人代名詞の自稱と對稱とは、他の語、殊に名詞より轉成せるもの多し。皆相手に對する敬讓の意をあらはす。

わたくし、わらは、みづから、それがし。

別表第十三圖
を見よ。

六

自分、僕、小生、拙者、

きみ、その、おんみ、そのもと、おまへ。

貴殿、貴嬢、御前、足下、閣下、殿下。

口語の人代名詞には轉成語多く、うちには指示代名詞より轉成したるものさへあり。指示代名詞には文語の訛りたるものあり。

副詞

たゞ、もつばら、もつとも、なほ、まづ、いと、

はなはだ、しばし、あまた。

等の如く、副詞はそのすべてに通じたる形態上の類似をば求むべからざれども、

すでに、さらに、靜かに、誠に、しきりに(たにのつき)
 わざと、さつと、はらくと、判然と(たのつき)
 むつとして、嚴として、燦爛として(きたるもの)
 よく、疾く、かなしく、面白く(形容詞の連用形)
 あまり、たとひ、つまり、くりかへし(動詞形の連用形)
 かねて、きはめて、すべて、はじめて(動詞にてのつききたるもの)
 絶えず、覺えず、はからず、思はず(動詞にすのつききたるもの)
 ゆめく、行くく、はるく、しらずく。(疊語)
 等は、やゝ其の類似を見出し得べし。中に活用語より轉成せるものあれど、副詞となりては活用することなし。

三 接續詞

また、かつ、或は、はた、及び、並びに、さて、若しくは、故に、爲に、かくて、そもく、すなはち、もつとも、たゞし。

等の如く、接續詞は殆ど形の類似をば求むべからず。かつ接續詞の多くは他の品詞より轉成せるものなり。

三 感動詞

あ、あゝ、あら、あな、あはれ、や、やよ、いで、いざ、えゝ、おゝ、おや、まあ、やあ、よう。

等の如く、感動詞はア行・ヤ行などの音をもつもの多し。

三 助詞

上篇語の品別、第二章、第十二節活用せざる品詞

の、が、と、を、に、へ、より、から、まで、ば、
 とも、ど、ども、て、で、つ、は、も、ぞ、や、
 か、こそ、ながら、ばかり、のみ、さへ。
 等の如く、助詞はすべてにわたりて形態の類似をば求む
 べからず。只、一・二・三音の簡單なる形なることの一致せ
 るのみ。

練習 左の文より活用せざる品詞を抜き出せ。

- 一 私は忽ち其の木の^根の下で、一つのひびきを聞いた。(口)
- 二 君の^足かんがへをいへ、さらば世の^まどひも自ら解くこと。
- 三 ゆきの^早きに比して、かへりの^晩さをきづかふ。
- 四 おやまあびつしより、お濡れな^さつた。(口)
- 五 暖簾と腕おしにて、少し力の脱けたる^感じあり。

空

第三章 品詞の接續

語のつゞき方

- (一) 行かん、死なん、あらん、過ぎん、消えん、
見ん、蹴ん、來ん、せん。
 - (二) 姉と妹とあり。汝と遊ばん。商人となる。
 - (三) 行けど、死ぬれど、あれど、過ぐれど、見れど、
消ゆれど、蹴れど、來れど、すれど、寒けれど。
- 右の例にて、助動詞の動詞につゞくは勿論、しかも、其の未然形にのみつゞきて、他の活用形につゞかず、助詞とは

體言につゞけど、どは用言につゞき、しかも其の已然形にのみつゞきて、他の活用形につゞくことなし。かく品詞相互の接續には一定の法あり。而して、其の接續中、注意すべきは助詞と助動詞となり。

助詞の接續

助詞には

- (一) 林の中に、鳥の鳴く聲す。
- (二) 猫が鼠を捕へる。(口)
- (三) 日出てば起きん。(未然形に)
- (四) 風が吹いて、花を散す。(口)(連用形に)

降れは 未然形
しめは 未然形
假定 しめは

別表第十四圖
を見よ。

空

のばて等の如く、活用語につゞくもの
(五) 「われも人なり。などいふもをかし。
(六) それはなき數に入る名をぞ留むる。といふ歌ぞ。
のぞ等の如く、種々の品詞につゞくものあり。その中、活用語につゞくものは、上の活用語の一定の活用形につゞくこと初に述べたる如し。

助動詞の接續

助動詞には

- (一) 外出を許さず。
 - (二) 人に笑はる
- のぞる等の如く、定まりて活用語の未然形につゞくもの、

降れは 未然形
しめは 未然形
確定 しめは
見よ

別表第十五圖
を見よ。

- (三) 食物をば炊きたり。
- (四) 東京に行きたし。
- のたりたし等の如く、連用形につゞくもの、
- (五) 貯へて不時の用に供ふべし。
- (六) まだ夜は明くまじ。
- のべしまじ等の如く、終止形につゞくもの、
- (七) 夜はしんくと更くるなり。
- (八) 日月は流るゝ如し。
- のなり如しの如く、連體形につゞくもの、
- (九) 獨逸は遂に降り。
- のりの如く、已然形につゞくものあり。

や終に
ふ連体につ
お花は
終止形につ

別表第十六圖
を見よ。

口語助動詞のつゞき方も、多く文語に準じて、皆定まりあり。

練習 左の文の助詞を指摘し、其の用法・接續等に誤あらば正せ。

- 一 つらしとも忍べ。
- 二 お花は妹と弟をつれゆけり。
- 三 (空)には一片の雲さへない。(日)
- 四 明日は降れども、出發せん。
- 左の文の助動詞の接續を検し、誤あらば正せ。
- 五 富士山の雪は夏も絶えまじ。
- 六 ホノル、には、立派な日本町が出來てゐます。(日)
- 七 首尾よく其の任務を終へり。
- 八 これ國民の忘るべからざる記念日なり。

下篇 文の構成

第四章 文

六 單語及び句

一頁、一を見

花。咲く。水。清し。われ。書。を。讀み。たり。
 右の一つくは單語なれども、
 櫻の。花が。水は。書を。咲く花。清き水。讀みた
 り。咲かず。美しく咲く櫻の花。讀み了りたる書は。
 等は、いづれも二つ若しくは二つ以上の單語の集合して
 成るものなり。これを句といふ。

六 文

八頁、八を見

(一) 花 咲く。
 (二) 水が 清い。(口)
 (三) 花 鳥を 招く。
 (四) 雪が 花に 似てゐる。(口)
 右の例は、二つ若しくは二つ以上の單語の集合なること
 句と同じけれども、或事物を題目として其の動作若しく
 は有様を敘述すること、句と異なり。これを文といふ。

練習 左の句と文とを別て。

- 一 清く流るゝ水。
- 二 清き水流る。
- 三 回る車に似たり。

- 四 私は、あなたを、あの友だちに、引合せませう。(口)
- 五 妹に飯を炊がしむ。(句)

第五章 文の成分

ち

主語・述語

八頁、八、一四
頁、三を見

- (一) 櫻 咲く。
- (二) 水が、清い。(口)
- (三) 花 鳥を 招く。
- (四) 雪が 花に 似てゐる。(口)

右の文の櫻・水が・花・雪がは其の題目にして、咲く・清い・招く・似てゐるは其の敘述なり。文の題目をあらはす語を主

語といひ、敘述する語を述語といふ。

如何なる文も主語と述語とをなかるべからず。

多くの文は、皆何がどうする若しくは何がどんなだといふ形に入るものなれば、主語は體言若しくは體言に準ずる語、述語は用言若しくは用言に準ずる語なり。

鳥 飛ぶ。

かれは すばやい。(口)

萌ゆるは みな緑なり。

美しきは 飛び去れり。

水の流れるのは 休まない。(口)

等の如し。されど、

犬は 動物 なり。 蝶は 昆虫 だ。
 落花 雪の 如し。 松風が 音樂の やうだ。
 は

何は 何 だ。
 何は 何の やうだ。

といふ形にて、助動詞なりたりてあるだです及び如し(やうだ)の述語となる場合なり。

七 客語

- (一) 風 櫻を 散す。
- (二) 生徒が 文を 作る。(ロ)

右の例の述語散す作るは他動にて櫻を文をの如き目的

六二頁、第六
 敘述の自他を
 見よ。

をいはずれば、意味完からず。

- (三) その面 猿に 似たり。
 - (四) 天皇 貞愛親王を 大禮使總裁と し給ふ。
- 右の例の述語似たりは自動し給ふは他動なれど、共に猿に大禮使總裁との如き標準をいはずれば、意味完からず。

- (五) 三の四倍は 十二に 等しい。(ロ)
- (六) 櫻は 梅よりも 紅なり。
- (七) 彼は 學生 なり。
- (八) 大軍 雲霞の 如し。
- (九) 子守が 兒に 泣かれる。(ロ)
- (一〇) われ 妹に 衣を 縫はしむ。

ト篇文の構成、第五章文の成分

三

一八頁、二四
を見よ。

右の例の如き述語には皆標準を要す。
文は述語の性質によりて、其の目的標準をあらはす語を要す。この目的標準をあらはす語を客語といふ。
客語は多く「何を」「何よとに」とあらはるゝ場合多し。故に客語は主語と同じく體言若しくは體言に準ずる語なり。

修飾語

(一) 美しき櫻餘ろに 咲く。

(二) 水甚だ清し。

右の例の形容詞美しきは櫻を修飾し、副詞餘ろには流るを、副詞甚だは清しを修飾せり。
文の中にありて、他の語を修飾する語を修飾語といふ。

修飾語は(一)の如く

どんな何。

と、體言につくものと、(二)の如く

どんなどうする。どんなだ。

と、用言につくものとあり。體言につくを形容的修飾語といひ、用言につくを副詞的修飾語といふ。

暖き風 盛りなる花を 揺かす。

走る汽車が 旅行する客を はこぶ。(口)

冬の風が 木の枝を 鳴らす。(口)

かれが學は 我が國に 知られたり。

花を見る人が 山に這入る日を 惜しんでゐる。(口)

月明かなる夜は 星 稀なり。
右の如く、形容的修飾語は形容詞の連體形、若しくはこれに準ずる語なり。

遙かに 富士山 見ゆ。

支那人は よく 日本人に 似てゐる。(口)

午前五時に 一同が 起き出た。(口)

式は 京都に於て 行はれたり。

汽車からおりと 雨が 降り出した。(口)

水清ければ 魚 住まず。

右の例の如く、副詞的修飾語は副詞、若しくは副詞に準ずる語なり。

三

獨立語

(一) あはれ、君は 逝けり。

(二) お花や、おまへは 御飯を お炊き。(口)

右の例のあはれ、お花やは、文の主要部には關係なくして獨立せる語なり。かゝる語を獨立語といふ。獨立語は感動詞及び呼掛の語なり。

練習 左の文の主語、客語、述語を分別せよ。

- 一 流るゝ涙雨の如し。
- 二 和犬は洋犬より小さい。(口)
- 三 家庭生活の改善は婦人の力による。
- 四 英國のワットは有名な發明家だ。(口)

左の文に成るべく多くの修飾語を與へよ。

五

海 見ゆ。（海は、見ゆの目的修飾語）

六

氷 水と なる。（氷は、水との修飾語）

七

呉服屋が 冬物を 賣り出した。（呉服屋は、冬物を賣り出したの主語）

（冬物は、賣り出したの目的修飾語）

第六章 成分の倒置及び省略

成分の常の位置

- (一) 花 咲く。
- (二) 猫が 鼠を 捕へる。(口)
- (三) 白雪 花と 見ゆ。
- (四) 母が 兒に 乳を 與へた。(口)

主—客—
 修飾—主—
 主—客—補
 一—
 補—客
 副詞的修飾の
 一—
 一—
 一—
 一—

右の例が、文の成分の常の位置にて、主語は上述語は下、客語はその間に在るものとす。但し(四)の如く、客語の二つある時、其の目的と標準との上下は自由なり。

(五) 赤き花 咲けり。

(六) 猫が 鼠を 巧みに 捕へた。(口)

右の例の如く、修飾語は、修飾せらるゝ語の直上にあるが常の位置なり。但し、

猫 巧みに 鼠を 捕ふ。

自分は 今 食事を 終へた。(口)

の如く、副詞的修飾語は、修飾せらるゝ語より、他の語を隔てて上にあること多し。

壺

(七) 太郎よ、汝 學業を 怠るな。
 (八) あれ、汽車が 來た。(口)
 右の例の如く、獨立語は文の頭に在るが常の位置なり。
成分の倒置
 文の成分の常の位置は右の如くなれども、

- (一) 仰げば尊し、わが師の恩。
- (二) 門を 私が しめました。(口)
- (三) 學校は その優等生に 與へん、この賞品を。
- (四) 私は きつとなります、えらい人に。(口)
- (五) あなたは 本を 持つていらつしやい、机の上の。(口)

矣

(六) あれ 蝶が 飛ぶ、ひら／＼と。
 等の如く、文の成分は常の位置を變じて、上下顛倒せらるゝことあり。之を**成分の倒置**といふ。
成分の省略

- (一) (私) 明日參上仕るべく候。
 - (二) 千里の道も 足下より。(起る)
 - (三) どうぞ、あなた (それを) 召上れ。(口)
 - (四) 次に 學校長 (卒業生に) 卒業證書を 授く。
- 右の例の如く、文の成分は、其の意味の、言外に推知せらるる限り、之を省くことあり。之を**成分の省略**といふ。

練習 左の文の倒置を正し、省略せる成分を補へ。

- 一 見よ、天下の形勢を。
- 二 まさか、そんなことが、あ(口)た(口)せ(口)ふ。
- 三 一年を経ざる著作は、讀むことなかれ。
- 四 思はざりき、君の今日あらんとは。
- 五 兄も馬に乗ります、弟も。(口)
- 六 待てども、來らず。
- 七 そんな事を、だれに、あなたは、お聞きでした。(口)

第七章 文の組織上の種類

老節

- (一) 秋 來れば、木の葉 もみぢす。

- (二) 舊き年 去り、新しき年 來る。

右の例の(一)の秋來ればも、木の葉もみぢすも、文の成分を完全に備ふれども、共に大いなる文の一部分をなす。(二)の舊き年去りと新しき年來るとも亦同じ。

文の成分を完全に備ふれども、或大いなる文の一部分をなせるものを節といふ。

支單文

- (一) 花 咲く。
- (二) 水が 清い。(口)
- (三) 鳥 花を 招く。
- (四) 雪 花に 似たり。

充
重文

(五) 私が 鶏に 餌を 與へる。(口)
 (六) 月日は 水より 速い。(口)
 (七) 犬は 動物 なり。
 (八) 落花 雪の 如し。

右の例は、いづれも、中に節を含むことなし。
 節を含まざる文を單文といふ。

(一) 舊き年 去り、新しき年 來る。

右の文の節、舊き年去りと新しき年來るとは對等の關係にて、いづれが主要、いづれが從屬といふことなし。かゝる節を**竝立節**といふ。竝立節は

- (二) 鳥 歌ひ、花 笑ふ。
- (三) 日 のどかに、風 暖かに、陽炎 燃ゆ。
- (四) 時 移り、事 往き、樂しみ 盡き、悲しみ 來る。

などの如く、二つは勿論、二つ以上對立するものあり。竝立節より成る文を**重文**といふ。

ハ
複文

(一) 秋 來れば、木の葉 もみぢす。

右の文の節、木の葉もみぢすは文の主要なる部分にて、秋來ればはそれに從屬せる部分なり。かく文の主要部分をなす節を**主要節**といひ、主要節に從屬する節を**從屬節**

といふ。

(二) 櫻の散るは、いさぎよし。

(三) 彼は、家豊かなり。

(四) 雨降る日は、陰氣なり。

(五) 日暮るれば、農夫かへる。

右の例の傍線を施せる節は、皆從屬節なり。
從屬節を含める文を複文といふ。

練習 左の文の節を検し、その組織上の種類を別て。

一 余は屢彼の書を読むを聞きたり。

二 日の立つのは早い。(日)

三 湊川は楠木正成の戦死せし處なり。

四 姉は琴を弾じ、我は花を生け、妹は茶を立つ。

五 此の本は印刷が鮮明だ。(日)

左の文を單文に別て。

六 春が来たが、花は咲かない。(日)

七 月落ち、鳥啼き、霜天に滿つ。

八 我が再び歸り來ん日は、即ち功の成りたらん時なり。

左の單文を組合せて、重文又は複文を作れ。

九 男子は沖で泳ぐ。女兒は濱邊で貝を拾ふ。(日)

一〇 鳥啼く。梢の花散る。川の水流る。

第八章 文の敘述上の種類

八二 敘述の形

- 右の例の(一)は單に事を敘述するに止まり、(二)は疑問の意をあらはし、(三)は命令の意をあらはし、(四)は感動の意をあらはせり。これ等は文の組織上の區別にはあらずして、敘述の形より來る區別なり。

三

平敘體

- (一) 風烈しく吹く。
 - (二) 風烈しく吹けるか。
 - (三) 風烈しく吹け。
 - (四) 風烈しく吹けるかな。
- 紫式部は源氏物語を作れり。

三

疑問體

- (三) 大正四年十一月十日、即位の大禮は行はれき。右の例の如く、單に事物を敘述するに止まるものを平敘體の文といふ。平敘體の終結は活用語の終止形を以てするを常とす。只
- (四) 風ぞ烈しく吹く。
 - (五) 紫式部なん源氏物語を作れる。
 - (六) 大正四年十一月十日にこそ大禮は行はれしか。
- の如く、文中に助詞ぞ、なんを用ひたる時は、その終結、連體形を以てし、助詞こそを用ひたる時は已然形を以てす。
- (一) 風烈しく吹けるか。

四

- (一) 汝かれを知れりや。
- (二) この事件に對する解決如何。
- (三) 誰か最も早き。
- (四) いつ歸り給へるか。
- (五) 右の例の如く、疑問の意をあらはすものを疑問體の文といふ。疑問體の終結は、多く疑問の助詞を以てするか、上に疑問の語を置きて、下の活用語を連體形とするか、或は上下に疑問の語を以てするを常とす。

命令體

- (一) 風烈しく吹け。
- (二) 汝次の間に答へよ。

五

- (一) 風烈しく吹けるかな。
- (二) あはれ、彼は逝けり。
- (三) あゝ、勇ましき兵士なるよ。
- (四) 右の例の如く、命令禁止希望の意をあらはせるものを命令體の文といふ。命令體の終結は、活用語の命令形、若しくは、命令禁止希望の助動詞を以てするを常とす。

感動體

右の例の如く、感動の意をあらはすものを感動體の文といふ。感動體の終結は感動の助詞を以てするか、上に感

動詞を有して、活用語の終止形を以てするか、或は上下に感動の語を有するを常とす。

(四) 來ること何ぞ遅きや。

(五) その勢いかに烈しかりしぞ。

右の例は、疑問の語の入りて疑問體の如く見ゆれども、其の實遅きこと、勢烈しきことの高度なるを、感動的に敘述したるものなれば、亦感動體の一種とす。

(六) 風やは吹く。

(七) 何の益かあらん。

(八) 彼の心事まことに悲しからずや。

右の例も、亦一見疑問體の如くなれども、疑ふ意は變じて

その反對を確むる意となれり。即ち(六)は風は吹かず、(七)は何の益なし、(八)は彼の心事まことに悲しといふ義を感動的に敘述したるものなれば、之も亦感動體の一種とす。要するに、以上四體の文は形態上其の終結によりて別るゝものなり。されば、

(一) 三十五と二十七との差を問ふ。

(二) 敵の右方の偵察を命ず。

(三) この兒の、親に孝なるは、感すべきことなり。

の如きは、實際の意は疑問命令若しくは感動にあれど、

(四) 三十五と二十七との差幾何なるか。

(五) 敵の右方を偵察せよ。

(六) この兒親に孝なるかな。
とは敘述の形を異にして、平敘體なり。要するに、すべての文は、改めて平敘體の形を取らしめ得るものなり。

練習 左の文の體を辨じ、終結を説明せよ。

- 一 何をか淑女といふ。
- 二 朝敵を亡ぼし、君を御代に即け參らせよ。
- 三 壺切の御劍は、御代々、天皇から皇太子にお傳へになる物だ。(日)
- 四 そんな馬鹿なことがあるものですか。(日)
- 五 誰か鳥の雌雄を辨せん。

改定新體女子文法終

大正十年一月十五日
大正九年十月廿九日
大正九年十月廿五日
大正九年十月廿五日
印刷發行
再版印刷
再版印刷
訂正再版發行

改定新體女子文法定價參拾壹錢
改定新體女子文法別表定價八錢
大正十三年度臨時定價金五拾六錢
改定新體女子文法別表金拾四錢

著者所有



不許複製

著者 春日政治

發行者兼印刷者 鈴木常次郎

發行者 鈴木常松

東京市神田區表神保町二番地
大阪府東區博勢町五丁目五十六番地

發行所 東京修文館
發行所 大阪修文館

東京市神田區表神保町二番地
大阪府東區博勢町五丁目五十六番地

